

地域づくりと住民の学習

～地域問題講座を実施して～

加藤 良治

はじめに

地域社会には、福祉、防災、子育て環境づくり、町並み保存、ゴミ処理等様々な解決すべき諸問題が渦巻いている。その内容は複雑で多岐にわたることがしばしばあり、解決にあたっては専門的能力が求められ、町内会・自治会が地域の様々なボランティアグループ、専門家等と協同して取り組まねばならないケースも少なくない。また地域社会には古くからその土地に住み続ける住民、転勤などで他都市から移り住む住民、外国籍の住民等々価値観、文化、生活習慣の異なる人たちが構成していることもあり、困難な問題が生じた際、利害対立をもたらしたり、場合によっては排除される住民を生み出しかねない。その意味でいえば、地域づくりというのは決して容易に事が運ぶわけではない。

こうした場合自らの実践活動を見直したり、地域活動の方向を模索したりしながら活動の力量を形成し、また住民相互の人間関係を築きその円滑化を促すような「学びと交流の場」が日常的に存するならば、地域課題も少しは解決の方向に向かうのではなからうか。

以上の問題意識をふまえ、筆者は地域づくりをすすめる上での種々の問題・課題をとりあげ、その解決の手立てをも考えようと平成8（1996）年度、名古屋市昭和生涯学習セン

ターにおいてささやかながら地域問題を考える講座を企画・実施した。それは上記で述べた「学びと交流の場づくり」といってもよい。講座終了後4年以上たつが、近年当講座の受講者から地域活動の実情をきく機会がしばしばあり、そうした講座即ち「学びと交流の場」の必要性を改めて認識することができた。講座での学習を契機に、その後地域実践活動に参画し力量を身につけた人たちが少なくなかったのである。

本稿では当講座の主に準備・実施過程を詳細に紹介し、受講者の軌跡にも若干ふれながら地域づくりのための住民の学習課題についてまとめてみた。

1 地域問題講座の準備

ア) 事業方針にそって

名古屋市の生涯学習センター（当時社会教育法上の公民館。平成7年までは社会教育センターと呼ばれていた）では市民の学習・文化・スポーツ活動に利用されており、年間おおむね3期に分けて実施している定期講座をはじめ各種社会教育事業を展開している。

当時の生涯学習センター事業努力点の基本的なものとしては次のとおりである。「①市民の多様化、高度化した学習要求にこたえること②市民の自発的・自主的かつ

系統的な学習を援助し育てること③地域の教育力や連帯感を醸成すること」（「平成8年版名古屋生涯学習センター年報」より）

こうした点に従って昭和生涯学習センターでは平成8年度事業方針に「高齢化、少子化等それにともなって生じる様々な地域課題解決にむけた学習機会を拡充しながら地域住民がくらしの主人公として生活の質を高めたり、地域づくりののにないてとしての力量がもてるようにコミュニティリーダーの育成に努めます」とうたうことになった。当講座は事業方針に沿って企画したものである。

イ) 住民とともに学習内容編成

事業方針をふまえ学習内容・運営を具体化するために住民とともに学習内容を編成することにした。地域づくりの実践に取り組んでいる人たちが、その過程において生じた問題を少しでも解決が図られるよう、またそうした人たちが力量を高められることをねらった講座を開設するため、昭和区内で活躍し社会教育やまちづくりに関心のある住民とともに講座準備会を3回開くことにした。準備会のメンバーは区政協力委員、福祉ボランティア、民生委員、区内の高校教員、生協関係者など多彩な顔ぶれであった。毎回6～7名の出席をえて準備会の会合がもたれた。

講座内容・運営についてはおおむね次のような意見が出された。

- ・ 講座は講義をきくだけでなくゼミナール形式がのぞましい
- ・ 社会教育や学ぶことの大切さについてきちんと学習できるように
- ・ 地域づくりをすすめるためにはやはり地

域への愛着とか、これからも住み続けたいという意識が必要と考えるが、この地域づくりの理念について今一度とらえかえすことが大切ではないか。

- ・ 町内会・自治会はともすればくらしやすい地域づくりを志すボランティアにとって足をひっぱる存在になっていないか。町内会・自治会の本来の役割とは何か、広い視野から考えてみる必要がある。
- ・ 男性の方にも講座に参加してもらい、それをきっかけに地域活動が促進されるようになれば、と考える。また地域づくりのための男性ネットワークが広がるとよい。

- ・ 第1回目の講座では、経験豊かな人から講座の趣旨や地域づくりのイメージについて具体的に提案してもらおう。

- ・ 講座終了後は地域、社会教育を考える学習を継続して行っていくとよい。

こうした意見をふまえながら講座名、学習内容、学習方法を検討した。講座名は「くらしやすい地域をつくろう」とした。学習内容については出された意見から学習すべき課題を探り出し、下記のようなプログラムを編成した。また受講人数にかかわらずディスカッションの時間を多くとることにした。

ウ) 学習プログラムと講師

第1回目「地域づくりは私たちが主役～だれでもはじめられる地域づくり～」

(自治体問題の研究者)

第2回目「元気な人からお話をきく①～昭和区・台町ふれあい公園づくりにかかわって～」

(公園愛護会会員)

第3回目「 同 上 ②」

～平針南学区コミュニティセンターでの
取り組み～ (区政協力委員)

第4回目「やはり必要！町内会・自治会」
(自治体問題の研究者)

第5回目「まとめ・座談会～男も女も学
んでちからをつけましょう～」
(社会教育研究者)

講師は愛知・名古屋の町内会・自治会事情に詳しい講師を選定した。第1回目の講師では地域づくりの主人公はだれか、地域づくりはどのような考えかたでどこからはじめていくのか、というやや理念的な事柄を学べるようにした。第2、3回目では、そうした理念を具体的に理解するために、実践事例のレポートを取り入れた。ひとつは昭和区内の児童公園づくり。町内会・自治会からではなく、一住民がはじめた運動から地域づくりのイメージをふくらますための内容である。他のひとつは町内会・自治会役員としてコミュニティセンターを拠点にして活動している人からのレポートである。ここでは町内会・自治会とは本来どうあるべきかを考えることとした。そして第4回目においては町内会・自治会の歴史・各地の実情、課題について学習することにし、また各受講者がかかえる問題、実態を多く出し合えるようにした。最終回の第5回目は地域活動に取り組む人たちが力量を蓄えるためにどのような学習が必要かを考えつつ、終了後の継続学習に結びついていくよう配慮した。

2 講座「くらしやすい地域をつくろう」 の実施

ア) 受講者の実態

受講人数は11名で当初のねらいどおりじっくりと学習・交流できるゼミナール形式ですすめることにした。なお年齢別では40代2名、50代3名、60代5名、70代1名。地域別では昭和区在住者10名、千種区在住者1名であった。

次に受講者の横顔をごく簡単に紹介すると次のとおりである。

- ・現在勤めているが明るい社会づくり運動など奉仕活動をしている。(男性)
- ・マンションの管理組合の活動に参画している。退職後は年金で生活しているがここ(マンション)を終のすみかにしたいと考えている。(男性)
- ・学区の自治会長をしている。春には花見、秋にはお祭りを行い、住民相互の交流を深めている。(男性)
- ・障害者施設のボランティアをして11年になる。社会教育ということを学んできた。町内会にも積極的に参加している。(女性)
- ・民生委員をし、また地域で配食サービスの活動に取り組んでいる。(女性)
- ・学区の町内会長に最近なり、50代の人たちも加わることのできる老人クラブづくりに現在取り組んでいる。(男性)
- ・昨年定年を迎え、町内会の会計や国勢調査を担当する妻の手伝いをしている。(男性)
- ・なごやかスタッフ(ホームヘルプ活動)をはじめ、地域の子ども会、スポーツ少年団など地域にも積極的にかかわってい

る。（女性）

- ・町内会長、民生委員をしている。住民主体の福祉まつりに携わっている。（女性）
- ・地域で文庫活動をしている。若い時とはちがいで老後には安心して暮らせるよう地域づくりが必要と感じるようになる。（女性）
- ・障害者施設でボランティア活動をしている。地域づくりに関心をもっている。（女性）

町内会・自治会活動あるいはボランティア活動の経験のある受講者は多いが、経験の多い少ないにかかわらず地域づくりへの関心、学習意欲の高さを窺い知ることができる。

講座の第1回目は時間をさいて受講者一人ひとりから受講動機をはなしてもらったことにした。「町内会活動について基本的なことを学びたい」「まちづくりとは何かをつかみたい」「活動のなやみを少しでも解決したい」「自分が取り組んでいる活動と区政協とうまくいく方法を考えたい」「今回の講座での学習を今取り組んでいる町内会活動に生かしたい」「これからの様々な地域活動に参加するためになにかの参考になれば」等々動機は様々。こうした受講動機をふまえ、5回の講座での講義、進め方を検討した。

イ) 学習内容

講座での学習はどのように行われたのであろうか。次に講義の概略と話し合われた内容をピックアップして記してみることにする。

（第1回目）「地域づくりは私たちが主役～だれでもはじめられる地域づくり～」

- ・地域づくりについて（住み続けていこうという意識や愛着がどれだけあるかは地域づくりにとって大事な視点。「私が」という一人称で地域を見回した時に何が欠けているか考えてみる）
- ・地域づくりの条件（人々のつながりをどうつくるか）
- ・ばらばらの住民から協同へ（自分が地域づくりをになう。協同のちからをつくる）
- ・地域の共同管理（町内会・自治会の質が問われる。行政の下請けではなく上に提案する力が必要。そのため町内会・自治会の中に入って変える取り組みが求められる）
- ・区に権限が持てるような改革
（第2回目）「元気な人からお話をきく～昭和区台町ふれあい公園づくりに関わって～」
- ・あそび場づくりのきっかけ（子どもが生まれ、遊ばせる場がないことに気づく。公園があつたらと考えるようになる。区役所に頼みに出かける。近隣の私立保育園との出会いが契機となり、平成4年4月に「あそび場をつくる会」を結成）
- ・子どもも含む市民参加により公園の設計実施。平成7年4月に児童公園が完成
- ・完成後は公園愛護会を組織。清掃や公園でのまつりに住民が主体になって取り組む
- ・自分自身が得たこと・感じたこと（人とのつながりや仲間ができた。区内に子育てネットワークをつくりたい）
（第3回目）「元気な人からお話をきく～平針南のコミュニティセンターでの取り組み」
- ・平針南学区と平針団地自治会の実情
- ・情報共有の大切さ（学区の抱える課題、

- 町内会費の用途等広報紙により情報提供)
- ・情報伝達と地域活動のかかわり (こまめな情報伝達は地域に関心をもつ人、地域活動に参加する人たちをふやす)
 - ・広報紙の重要性 (常に弱者の立場にたつ等)
 - ・地域活動に参加することの社会的意味 (高齢期の生活の質を高める。日常的な地域活動はボランティア活動の原点。政治、行政の実態を実感的に把握することはやがて住民主体の社会実現をめざすエネルギーに転化する可能性あり)
 - ・コミュニティセンターの活動の紹介
- (第4回目)「やはり必要!町内会・自治会」
- ・町内会・自治会の歴史
 - ・町内会の機能 (親睦、共同防衛、環境整備、行政補助、圧力団体、町内の統合統制、対外的代表機能)
 - ・町内会・自治会をどうとらえるか (地域共同管理の主体としてとらえる。住民支配の機能としてとらえず、住民が積極的ににない組織を発展させていく)
- (第5回目)「男も女も学んでちからをつけましょう」
- ・近隣住区の中核としての近隣生活の今 (「向こう三軒両隣」の見直し・再評価の時代。匿名生活の問題性。少子化・高齢化の時代の近隣生活)
 - ・生涯設計と近隣生活 (世代別近隣意識のずれ。地域知らずく幼年期)、地域忘れく青年期)、地域ばなれく大人期)のつけは重い)
 - ・地域学び、地域思い、地域戻り=隣人関係づくり・コミュニティ活動
 - ・生涯学習とまちづくり (地域を知ること

がまちづくりの出発点。違った人たちとの出会い、男性の参加、暮らしの知恵と力を身につける学びの大切さ)

毎回上記のような講義をふまえ、話し合いの時間を十分さいた。各回とも時間が足りなくなるほど活発な話し合いがなされた。その主な内容を紹介しておこう。とくに町内会・自治会のあり方に関してその問題・課題が生々しく出し合われた。「神社の寄付金をなぜ集めるのか」「区政協力委員の仕事が行政の下請けになっていないか」「自治会長のなりてがなくて困っている」「町内で諸活動に取り組もうとする時、近くに集会所がない」等々受講者が日常の地域活動の中で疑問を抱いていること困っていること、また「自治会費はいくらぐらいがいいか」「区政協力委員は何年ぐらいで交代するのが望ましいか」等リアルな質問も出された。それぞれ出された事柄については講師のほうからわかりやすく答えてもらいつつ、町内会・自治会の本来のあり方についてもほりさげて考えあった。とくに地域づくり実践に対して行政がすぐ対応できるためには区の権限を強化すべきではないかとの意見が出され、行政のあり方を考える契機となる議論もなされた。

講座の後半では実質的には女性の地域活動が目立つ中、男性も大いに地域に参加していこうという意見が多かった。「退職したばかりで地域については妻に比べ何も知らない。地域を知ることから始めていきたい」「自分の属する町内に老人クラブがないので、ふれあいの会を結成した」「妻がPTA役員をしているが、自分ももっと地域に関心をもち活動していれば色々相談に

のれるのだが。これからはもっと自分にあった地域参加ができれば」「自治会で働き盛りの男性に参加してもらおう行事を考えているところ」等々男性受講者から積極的な意見が出され、一人ひとりの今後の活動について活発に話し合われた。

ウ) 議論のなかから明らかになったこと

講座での議論をつうじて地域づくりの課題がほりさげられ、下記の三つのことが明らかになった。

ひとつは町内会・自治会について理解を深めることが欠かせないこと。はじめて町内会長を引き受けても組織について何も知らないなら前任者の活動を踏襲するのみで発展は望めないであろう。また区行政からの要請に限って動く町内会・自治会であるならば、「行政の末端組織」になりさがり、住民の声を無視する組織ではないかという非難をまぬがれないであろう。学区内に50代の住民も含めたふれあいの会(老人クラブ)を結成した受講者のHさんは区行政に協力しながら、学区住民の要望にも応え創意ある地域づくり実践に取り組み、それを徐々に発展させつつある。町内会・自治会への理解の深まりがそうした活動を生み出したといっても過言ではない。

ふたつめに、地域あるいは町内会組織をより望ましい方向へ変えていくためには正すべきことを声に出すことである。何人かの受講者からも「声に出すことが大事」「中々いえない」と率直に語り合われたが、改善できたところは勇気をもって声を出したところであった。とくに地域住民の要求にもとづいて活動しているグループが町内会と摩擦のあるところが見受けられるが、

粘り強い理解を求める働きかけによって変化をもたらしている実践事例も少なくない。町内会・自治会無用論に陥らないことであろう。

みつつめに、はじめて地域活動に参画する際は地域を知ることからはじめるべきである。とくに男性の場合は、職場が時間の大部分を占めるので地域の実情に疎くなっていることが多く、講師の講義のなかでも指摘されていたが意識的に地域の行事に参加したり、町の役員のところへ出かける等して地域の人たちと顔をあわせ、親しく交わる機会を作り出すことが求められよう。

3 講座終了後の学習と実践

講座終了後は受講者から次のような感想をよせてもらった。

- ・地域のつながりのたいせつさを知りました。これからは小さいことでもお役にたちと思います。今後は市・区の行政のしくみを学びたい。
- ・自分が地域活動にどう関わっていくのかまだ先がみえない状態。さらに考えていきたい。
- ・地域で色々活躍している人に出会うことができ、大変勉強になりました。地域づくりについてさらに勉強したい。
- ・区政協力委員・民生委員などがどのように選出され、何をしているのかおおざっぱに理解できた。今後は団地での活動に生かしたい。
- ・自治会活動に直接参加したことにより関心を持ち、勉強させていただきました。
- ・講座は終わったが出会った人たちを次へどうつなげていくか考えています。

・今後は区の福祉・医療・教育など具体的なことを勉強してみたい。

当講座以降、継続的に学習を続けていくことになり、受講者と生涯学習センターが協力しあい、とりわけ昭和区内の地域づくりの課題を考える「暮らしやすい地域を作ろう～みんなで考えるつどい～」（会場は昭和生涯学習センター）を実施することになった。このつどいの準備にあたっては受講者以外で地域づくりに関心のある区民も加わり、子育て環境づくりをテーマにした学習・交流を深めた。平成9年6月実施の第1回目のつどいにはじまり、翌年の3月まで4回開いた。第1回目のつどいでは住民主体の児童公園づくりに取り組んでいる区内のK公園愛護会のメンバーから、第2回目は社会教育研究者から、第3回目は区内の子育てマップづくりのメンバーから、そして第4回目は子育ての問題研究者から報告してもらいそれぞれの課題を考えあった。各回のつどいのテーマは下記のとおり。

（第1回目）「公園づくりのこれまでこれから」

（第2回目）「生涯学習とコミュニティ～今学ぶことはなぜ大切か～」

（第3回目）「子育てネットワークをひろげましょう」

（第4回目）「地域で子育て環境をつくる～私たち一人ひとりにやられること～」

地域づくりに関心のある区民、とりわけ子育て環境づくりに実際に参画している人たち、公園づくりに携わっている自治体職員、町内会・自治会関係者等幅広く出席してもらうことができた。こうしたつどいがきっかけに、学区で取り組まれている公園づくりや地

域の子育てマップづくりの活動にはずみをつけることになった。

4 受講者の軌跡～Hさんの場合～

講座を受講するHさん（男性）とお会いしディスカッションする機会を最近もつことができた。講座を契機に地域づくりのイメージをふくらませ、地道に町内会・自治会活動に取り組んでおられる。Hさんが講座を受講するまで講座受講後の軌跡を追ってみた。

Hさんは60代。名古屋市昭和区在住。退職後区政協力委員（町内会長）に。世帯数が450弱で950名程度の人口を有する町内で日常活動をされているが、当初の頃、ある町内に住む男性から「50代以上の人たちが町内でつながりができるといいが」と相談をもちかけられる。さっそくその実現にむけて関係者のグループ化をめざす。もともと町内に老人クラブがなかったため、50代以上の「ふれあいの会」を結成。そんなおり、当講座「暮らしやすい地域づくり」を案内で知り受講することになった。「町内会・自治会とは」「区政協力委員とは」等々基本的なことを学べたこと、また受講まで全く知らなかった同じ学区の区政役員をはじめ昭和区内の地域づくり関係者とも知り合えたことにより、それからの町内会活動に拍車がかかる。

Hさんは町内会のみならず、学区全体で組織されている「福祉推進協議会」の役員もかね、それまでなかった新しい事業を関係者とともに実施。年間（月2回程度）つうじて「健康相談・体操の会」を地元の公民館を利用して、また地域の子ども、親が交流できるよう「ふれあい伝承あそび」を小学校を会場にして開催されるようになった。講座を出発

点にHさんは着実に活動力量を身につけられたようだ。現在では福祉問題等学びつつ楽しみながら地道に活動しておられる。

5 地域づくりは学びと交流がキーワード～講座をとおして思ったこと～

地域には、自己の持ち味を生かし社会貢献したいと望む人たちが在住している。だが、せっかくそうした人たちがいるのにもかかわらず、地域づくりへの参画を促す出会いの場が保障されていないならば、「宝の持ち腐れ」に終わってしまうことであろう。その意味から、まずは様々な住民を呼び込む「学習と交流の場」を設定することは地域づくりの発展に欠かせない。そしてできればその場では次の2つの点を重んじたい。それは前項で記した講座で重視したことでもある。

ひとつは、問いや気づきをもたらす学びがあること。前述のHさんは地域活動をしていくうえでの原理原則的な事から、例えば「区政協力委員とは本来何をすべきか」等を理解することにより、それまで知らなかったことを知り、また何となく思い込んでいたことに対して問い、疑問をもつ、あるいは「こんな活動に取り組んでみよう」と地域づくりのイメージをふくらませていく学習の経験をされたように思う。それは「問い」「気づき」のある学びといってよい。そうした学びは学ぶ意欲をさらに高め、地域づくりのための実践力量を徐々に形成していくことであろう。

他のひとつは、あいとつながりをもたらす交流があること。こうした場合は単にテーマにもとづいた学習のみに意味があるわけではない。交流することが欠かせない。学習・交流により人と人が、他者の思考や感情を

共有しながら相互の親しい関係、はげましはげまされる関係を築いていくことであろう。そしてそのことが契機となり地域づくりへの協力・協同の関係を生み出していくのではなからうか。

おわりに

さて、名古屋市コミュニティ研究会は「21世紀におけるコミュニティづくりへの提言」(平成11年)をまとめている。その中で現代コミュニティの課題を次のように記している。

「前者(伝統的市民組織<町内会等>)のみに正当性を認めて後者(市民活動型組織)を排除したり、その逆に前者を前近代的組織(その運営の民主化は課題であるが)として否定するような偏狭な考え方を克服し、何にも変えがたい地域資源として地域住民の活力を最大限に発揮できるようにすることが必要である」

ここで述べているように、要求にもとづいた内発的な市民活動に対して、それを見守り理解協力することが町内会等伝統型市民組織の役割といえよう。いっぽう町内会等の取り組みに対して、市民活動家は日常的に接点を持ち、また協力できる点があれば苦言を呈しながらも協力し支える姿勢が求められるであろう。それぞれの組織がお互いに排除することなく認め合い、足りない点を補い、寛容さを保持し、一致できることには協同していくことができるならば地域づくりの質はしだいに高まるにちがいない。

とはいえ、そうした関係を築くことは容易ではない。時間を要することであろう。その手立てとして幾つか考えられるがひとつは趣味やスポーツ活動等気軽な取り組みをきっか

けに地域住民の大多数が顔をあわせ、お互いに知り合ったり親しくなったりできる親睦はなくてはならない。そうした出会いは人と人を結びつけ、地域内に様々な相互支援のネットワークを形成する契機となると考えられるからである。二つ目は上記で紹介した講座、つどいのような相互学習・交流の場、地域課題を考えあう場を必要に応じ設定し、学習者が地域づくり実践の力量を形成すると同時に、町内会・自治会役員、市民ボランティア、自治体職員、専門家等が対等に議論できる素地をつくることである。このような地道な取り組みにより協同を促し、福祉、子育て、環境等地域の課題解決にむけたネットワークが幅広く形成されるのではなかろうか。

その意味からも人を育て、様々な立場の住民とともに協同する契機を促す「学びと交流の場」がこれからの地域づくり実践に一層求められていると考える。

（*本稿は平成9年11月にまとめた講座「くらしやすい地域をつくろう」の記録を修正・加筆したものです）